BROADCASTING CREATORS' ASSOCIATION OF JAPAN

放送人の会

No・31
2007・4・20

〒102－0094　千代田区紀尾井町1－1　千代田放送会館　3階
TEL&fax　03－3221－0019　E-mail info@hosojin.com
代表幹事　今野勉　　編集担当　磯村健二、伊藤雅浩、鈴木典之、長沼士朗、松尾羊一

緊張感と脱力と

代表幹事　今野　勉

放送人の会創立十周年のことし。「発掘！あるある大事典Ⅱ」事件が起きた。運命的なものを感じる。というのは、放送人の会創立の契機となったのが、その頃、NHKや民放に続出したやらせ問題の不祥事だったからである。視聴者やマスコミからの、放送局への糾弾、とくに、番組制作にむけられた不信と非難の嵐は、私たち制作現場にあった者に容赦なく襲いかかった。

ある意味では、放送人の会は、そうした非難、不信に対して制作者としての矜持を保つために結成されたともいえる。それから十年経ったことし、ふたたび世間をゆるがす不祥事が起きたことは、私たちに、一種の無力感をもたらす。

とはいえ、十年の歳月は、それなりに意味を持つ、とも言える現象が、私たちの周囲に起こっている。

たとえば、放送人の会の会員であり、幹事である村木良彦さんが、「あるある大事典」事件の外部識者による調査委員五人のうちの一人に登用されたこと。

たとえば、民放連の広瀬会長が、この事件に関して、映像事業協同組合理事長の澤田隆治さんと放送人の会代表幹事の私を指名して「月刊民放」で鼎談を実現したこと（澤田さんも放送人の会会員）。

会員個々人の実績もさることながら、会員が事件について社会的参加や発言を求められるという今回の情況は、放送人の会の十年の実績がその背景にある、と考えてもいいのではなかろうか、と私は思っている。

十年目のことし起こったこと、起こるであろうことは、負の事件だけではない。発足当初から、各種事業の共同企画、共同主催で手を組んできた放送番組センターとは、ことしからさらにその共同企画、共同主催を深め、広げていけそうな情況がある。

また、来年、放送人の会が日本側の主催組織となっている日韓中テレビ制作者フォーラムを、福岡市などで開催しようという案が有力となっており、放送人の会が、東京だけではなく、地方でも各種のイベントを開催するうえでの重要な一歩となることが期待されている。

個人的なことを言えば、最近、各種イベントや幹事会のあとの飲み会が、結構楽しい。ゲストとの対話あり、会員同志の過去の番組、現在の番組などについての激論あり、「あるある大事典」問題についての談論風発あり、で、刺戟されることが多い。

それら、さまざまのことを通じて、今、私が感じているのは、NHKや民放、あるいは制作会社の境界を越えて、あるいはジャンルを超えて、あるいは、地方と東京の枠を超えて、という放送人の会のモットーが、単なるスローガンではなく、実質的な意味を持ち、有効性を発揮し始めていること、である。

時代を超えて、というモットーも、たとえば「放送人の証言」という事業を通じて（すでに百人を超える証言が集まっている）放送界の大きな歴史的文化財を集積しつつある、という実感を持てるまでになっている。

時代を超えて、に即して言えば、あとは会員の世代交代をどう進めるか、ということは宿題としてある。

その問題について、最近、面白い発言をある会員から聞いた。そんな宿題、背負うことないよ。今やってる会員が、やってて楽しいと思う間、やっていればいいんであって、それでお終いならお終い。もし、その姿を見てて、楽しそうだから、私も、といって参加してくれる人がいれば、それはそれで結構、というものであった。

最近、脱力系という言葉を時折聞くが、まったく、ある会員の発言に、私は、いい意味で脱力してしまったのである。

「あるある大事典」問題　座談会

出席　伊藤雅浩　大山勝美　各務　孝　北村充史
今野　勉　露木　茂　松尾羊一　村木良彦

開催日　三月三十日（金）　於　放送人の会事務局

「番組」の作り方とは

A　今日の朝日新聞の記事は面白かった。元地検特捜部の熊崎さんは「ええっ、こんなんで番組作っちゃうの？」と驚天動地だったらしいね。

B　番組作りのことはどうやって調査委員にわかって貰えたのだろう？

C　とにかく本を読んでもらって…今野さんの「テレビの嘘を見破る」は委員全員に読んで貰ったとか…そしてやっと委員たちは少しづつわかってきた。最初は殆ど全員がプロダクションに発注するからこんなことが起きると単純に思い込んでいた。

A　新聞記者にもこの本を読ませたい。彼らは外国の事例を知らず、せまい日本の中だけでものを考えている。シロかクロか？捏造が三回では多いのか少ないのか？それを聞くためだけに取材に押しかける。

B　ゼネコン取材と同じ感覚だ。下請け、孫請けがけしからん、との前提から考える。

C　ラテ欄担当の文化部や学芸部の記者には番組作りがわかっている記者がいるはずだが、こんな事件になると不思議なことに全く出てこない。すべて社会部の仕切りだ。

A　彼らは科学者のところへも取材に行ったが最初から結論を持っていて、その裏づけの証言を求める。科学者は怒っていた。

B　「結論が先」は「あるある…」と同じだ。

C　一方、調査委員はすごく勉強した。

A　報告書を読むと委員が勉強したことがよくわかる。

B　素直に書いてあって、一時代前のような錯誤がない。制作者の内部的自由を明記したのは今回が初めてだろう。制作会社と放送局の新しい関係について書いたのも評価されていい。

C　この事件が起こって制作会社を局がどう思ってきたか、それに対して制作会社をどう思っているかがモロに出た。ある意味でいいことだった。

A　いつも言われることだが、何故こんな時にメディアは共闘しないのか。これはテレビの事件だとして自分のメディアの問題だとは考えない。これは企業別労組ばかりで職能別労組がないためなのか。マスコミに働く横の連帯感は極めて乏しい。一時共同通信の原さんなどがやっておられた「マスコミ市民」の運動は労組レベルを超えたものだったし、昭和四十年代までは民放労連は企業の枠を超えて制作者同士が連帯する横断的な活動をしていたものだが…

B　そう。「燃えろ！アンテナ」だ。和田勉なども入って、湯河原の新聞協会寮でやった。あの頃は日教組大会では必ず分科会があり、僻地教育の報告や阿部進の実践報告などをやっていた。民放労連も制作現場の連中がラジオドキュメンタリーはどう作るかなど実際的な体験交流をやった。そんな横断的な交流が今はないんだね。　権力を監視する立場のマスコミと労組の立場は近いのだが、「わが局」意識にとりかこまれている。

C　企業を超えての横の連帯どころか、企業の中の例えば報道と社会情報との横の連帯すらない。ワイドショーが問題を起こすと「そら、みたことか」と報道はせせら笑い、自分の問題とは考えない。

A　実名か匿名かの判断基準は局内でのセクション別に違うし…

B　先日、重村一さんは「放送の悲劇は株式を一部上場したことに始まる」と言った。名言でね。新聞は株式の上場をしていないから収支の発表もしない、社会的な役割を果たしていると毅然たる態度だ。放送は上場したために収支は株主に公表しなければならない。売り上げを上げ、利益を確保しなければならない。一般企業として利益をあげることと、メディアとしての使命を果たすことの異質な企業論理を同時にこなす放送局の経営者は大変だ。

A　だから経営者たちは苦しんで結局視聴率にすがるしかない。一方政府からはデジタル化で追い込まれている。デジタル化のためのお金がない。増資でその資金を作る。そこに企業乗っ取りの動きが出たりして、企業としてはますます利益が最重要になり、視聴率が重要になっている構造だ。

放送法改正を招いてしまった

B　今回の事件について、総務省は電波法八十一条に基づいて資料の提出を求めたと言われている。これまでは「法律の定めによるものでなければ資料の提出を命じられない」とされていて、要請にたいして局は「任意」で提出してきた。電波法八十一条は「総務大臣は、無線通信の秩序の維持とその他無線局の適正な運用を確保するため必要があると認められるときは免許人に対し、無線局に関し報告を求めることができる」というもの。これは無線局と施設に関する条文で、これを元に番組の内容について報告を求めるのは拡大解釈だとの意見が多い。しかし、局に意見を聞くと「実は恥ずかしい不祥事ばかりで、要請とか任意とか関係なくひたすら頭を下げて提出しています」と言う。

C　電波法は放送のハードを規制するもので、番組に関する法律は放送法だろう。

A　そうなのだが、かつての「アフタヌーンショー」事件の時以来、「法律違反があれば電波法七十六条によって、電波の一部停止を命じることができる」という見解を総務

省は持ち続けている。

B 今放送法の改正が話題になっているが、総務省はNHKの受信料の改正の他に、行政処分の方法として注意、勧告、警告と電波の停止の間に「具体的な改善策の提示を求める」といった条文を考えている。菅総務大臣にたいしては自民党のなかでも「やり過ぎ」と批判があったのだが、「あるある…」が法改正を誘い出した。

C 今回の総務大臣の見解で気になったのは「バラエティーに限らず、報道からドラマまで含めて事実に反するものは注意する」との発言だ。報道は事実を伝えるのだがドラマはフィクションなのだから事実に反して当然だ。そんな発言が堂々とまかり通っているのはおかしい。

A そのおかしさを新聞記者の記事レベルでは切り返せない。

B 関西テレビは更に何にも言えない。それまでもネット・サロンなどではいろいろ指摘はあったのに無視してきたのだから反論のしようがない。番組の誤りの指摘に対して何らかの対応をしてきたなら「こうやってきた」と反論もできるのだが、ほったらかしで次々あんな番組を作らせてきた事実があるから開き直れない。資料の提出を拒否するなど、できることではない。

C 当事者能力に欠けている。これまで番組作りは各パートはそれぞれ対等でそれぞれに責任を持つという形で行われてきた。かつては何か起こるとみんな関心を持ったのだが、今はみんな知らん顔をするという。時代のせいなのか、仕組みのせいなのか、それがわからないままに事態は進行した。

関西テレビの内部では

A BPOの会報でNHKのプロデューサーが「あれを見ておかしいと思わない人は少なくともプロではない、放送関係者ではない」と言っている。素人が見てすぐおかしいとわかるのに、現場のプロデューサー、ディレクターには全く意識されなかったのか？

B 局内でアラームは鳴っていた。この十年間のうち番組審議会で「あるある…」が取り上げられたことが三回ある。議事録を読むと「大変面白い」と評判がいいのだが、一、二の委員から「こんなに言い切って大丈夫なのか？」「科学的根拠はあるのか？」と不安の発言がある。この番組が始まってすぐの時にこの発言がある。番組審議会での発言だから当然担当のプロデューサー、ディレクターには伝わっている。それが無視された。インターネットでもおおくの「おかしい」「だまされた」の記事があり、批判の本も出たのに現場で深刻に検討された形跡がない。局のプロデューサーたちは「本が出たときはびっくりしました」と言っている。局内で話したことはあるが「現場を信頼していた」と言う。九つの班があり、番組制作のための時間はたっぷりある。実験はちゃんとやっているはずだ、まさか捏造などあるはずがない、と局内では思っていた。

C 制作担当や幹部が全く動かなかったのは感度が鈍かったとしか言いようがないが、何故感度が鈍いのか？

A 「外部で批判する人と立場が違うから」という言葉が返ってくる。

B どんな意味？

C 「娯楽番組なんだから、うるさいこと言われても困る」という意味だ。つまり、それが感度が鈍い証拠で、娯楽番組なんだから多少のインチキがあって当たり前なんだという意識だ。

A 文句を言うと「多少のことはいいじゃない」という態度は関テレだけじゃなく広くテレビ局一般に共通している。

B 局の上層部は誰もが「この番組はうまくいっている」と思っていた。視聴率はそこそこいい。スポンサーは満足している。

C スポンサーは？

A 花王の一社提供。

B 本当は多くの危険を内蔵していたのに視聴率とスポンサーの満足とで危険には目をつぶってしまった。今では花王は「だまされた」と怒っている。

C この事件が大きく報じられたとき、「何故すぐおかしいと思わなかったのか？茨城県人に太った人はいないのか？」との声があがった(笑)。これまでにもそんなおかしいことはあったが、これくらいはいいだろうと社内全部が許していたのではないか。

A 直接の害はないから…

B いや「納豆」ではスーパーで売り切れ続出で騒ぎになった。増産で設備投資し、パートを増員した零細企業もでて大損害を受けた。あれがなければ捏造はまだまだ続いていただろう。

C 番組審議会で「おかしい」と言う人がいてもするっと通ってしまった。番組審議会で特定の番組を審議の対象とするときは通常担当のPやDが同席して説明する。番組審議会は多くの場合ヨイショ大会の雰囲気で、そんな場で「だいじょうぶか？」との少数意見には敏感に反応していない。

「あるある…」の制作体制

A 関テレの担当は二年ごとに変わり、日本テレワークの担当は終始変わっていない。会議の場でも局側は番組の内容にはほとんど何も言えない仕組みだ。

B テレワークにカリスマ的な人物がいて、他のプロダクションに対して番組作りのマニュアルやいろんな指示が出されていた。

C 「納豆」は起るべくして起こった事件だと思う。「納豆」を作ったプロダクションは「アジト」で担当ディレクターはこの番組のADから出発して、だんだんに認められてチーフディレクターになった。その間「あるある…」の仕事ばかりで他の仕事の経験がない。彼のテレビ作法、マナー、テレビ観はこの番組だけで育っている。

A アジト以外のプロダクションの作品にも捏造は発見されていて、番組の作り方全体に問題はあった。「NGだ」「これはボツだ」とするバリアーは徐々に下がっている。「納豆」の場合ディレクターは五作目になるのだが、これまでボイスオーバーなどの捏造はやっていて誰にも何も言われない。むしろうまくいって、ほめられている。

B あれだけのプロダクションが競争している状態だから、あのプロダクションがあんなことをして通ったのなら、こちらも同じことかそれ以上のことをやらないと負けるとあ

せる。少しずつお互いに競争してバリアーを低くしてきた。すれすれがうまくいって、更にすれすれにとスパイラル下降だ。

C 十六本の番組が捏造から不適切な表現の番組とされているが、そもそもこのテーマはどうやって決められたのだろう？企画する根拠はあると思うが…

A それが一番驚くのだが、「あるある…」ではもっともお金と時間と知恵をつぎ込むべき番組の企画にほとんど力を入れていない。実にいい加減だ。リサーチャーがいない。企画会議で、誰か二、三人のアイデア、思いつきでテーマが決まる。「ダイエットでいく」と決めたときにテーマの核心である「納豆」はまだ全く想定されていない。

B 関テレから配布されたペラ四枚の番組制作の説明書ではまずテーマ設定があり、「短期間でダイエット」のテーマがかかげられ、それから「テーマに沿った情報を集めること」を命じている。本末転倒なんだ。われわれが情報番組を作るときはまず「今度、納豆の成分の中にダイエット効果のありそうなものが発見されたのだが、これで番組が作れないか」と考える。それから「短期でダイエット」の番組を作ろうとなる。「あるある…」では初めに何にも材料がなくて「短期でダイエットできる。これはあたるから、これで行こう」と決める。

C 「正月明けで、みんな飽食の肥満を心配しているから見てくれるはずだ。やろう」となる。最初に結論ありきの企画で情報番組じゃない。しかし、そんな方法で番組が作れるという奇妙な過信があったわけだ。

A 納豆で行くか寒天で行くかに科学的な根拠はない。「テーマが『短期でダイエット』に決まったが何かないか？」との電話がアジトのDに入る。テーマが決まったのは八月。制作のための時間は十分ある。しかしアジトに電話が入るのは一ヵ月半後。この間誰も何にもしていない。アジトの彼はその間別の仕事をしていたから、忙しいし電話をしても意味がないだろうと思ったからだと言っている。アジトのDはそれから十日ほど後にリサーチャーに何かないか探してくれと電話をしている。リサーチャーが大学の先生が納豆についてこんなことを発表していると探してきた。

B リサーチャーというのは助言集団？

C そう、フリーライターとか。「アメリカ横断ウルトラクイズ」や「なるほどザ・ワールド」などの番組が出てきて「知的エンターテイメント」と呼ばれたころ、クイズや人の知らない事実の発掘のために放送作家プラスリサーチャーという存在が重要になった。それから「情報バラエティー」と呼ばれる番組が多くなり、リサーチャーと構成作家がますます重要になった。

A 情報バラエティーでは構成作家を何人も集めて、アイデアを競わせる。彼らにとって科学的根拠は実はどうでもよい。素材をいかに面白く見せるかだけを考える。

B しかし科学的実験や学者の証言をある商品のためにあからさまに利用するようになったのはテレビショッピングのせいだ。それはアメリカでも同じだ。

C 恐ろしいことに、「どんなデータでも目的に合わせて用意します」を売りにしているプロダクションがある。

A データの捏造か？

C いや捏造でなくて辻褄合わせだ。無理やり解釈すればそう言えなくもないとか、「こういう説のお医者さんが必要なら探してきます」と探してくる。そんなプロは今度の事件でなくなるだろう。

A 実験に参加する人たちもそんなプロダクションが集める。ネットでテレビ局就職希望の学生を集めると口が堅くて絶対インチキをバラさない。〝驚きの表情〟などもうまく演じるから（笑）。

B 取材テープを見ると「もうちょっと驚いて」と注文されてそうやっている場面があった。縁日のサクラのテレビ版。

C 知らないうちに恐ろしいことになっている。何でもやっている。それが客観的なデータに基づいているかのように作られているエセ科学バラエティーだ。

A 「あるある…」以外は大丈夫なのか？

B 他にいくつかの局で問題が出ている。後ろめたいところはいま口をつぐんでじっとしている。

下請けの形態は？

B 先日の重村さんの話では「局と外部プロがイコールパートナーになっていない。一緒に番組を作る意識がない」と問題点として指摘した。重村氏の話では局が強くて制作会社が弱いのだが、「あるある…」の場合は逆で、局の担当はころころ変わり、テレワークのPが番組の大黒柱になっている。局側はお金を出して〝こ〟こ頭を下げて「よろしくお願いします」というだけだ。

C 関テレは制作費の面ではほとんど儲けがない。ほとんどがテレワークに行って局には一〇〇万くらいしか残らない。その中から番組宣伝の広告費をインターネットも含めて出すので四苦八苦している。

A 今度の文春にATPが制作費についてまとめていて、なかなかよくできている。あれによると「あるある…」は年間五〇億、一本一億、しかし最終の孫請けの会社に渡るのは八〇〇万とか…

B これには誤解がある。アジトに行ったのは確かに八〇〇万だ。かつてはスタジオ使用料を含め大きな費用を受け取ったこともあるが、今回はアメリカの学者へのインタビューと日本の二人の学者へのインタビューだけでほとんど費用がかかっていない。実験は八人に対して行ったもので、日当を計算してもそんなに費用はかからない。むしろ八〇〇万というのは何に使った費用かということになる。お金が半分になったというのは事実なのだが、決して足りない金額になったわけではない。その点は新聞は誤解を広めている。

C 日本の下請けの不幸な形の一つなのだが、関テレは孫請けに関して何らの条件、注文をつけていない。条件がつけられなければテレワークは儲け放題のことをしてもかまわない。これは実にいびつな関係だ。この関係がきちんとしていれば関テレの担当は二年ごとに変わろうと番組に対する格別の情熱がなかろうと役割は果たせる。しかしテレワークの持っていた力には誰も逆らえなかった。テレワークが間違えるとどこも

チェックができなかった。

A テレワークがマネをしたのはNHKエンタープライズだ。NHKはエンタープライズに発注し、エンタープライズが例えばテレビマンユニオンに発注する。何故直接NHKからテレビマンユニオンへではないのか。これは発足のときからもめにもめていた契約問題なのだが解決はしていない。というのは、その中間的存在、たとえばNHKエンタープライズは常に得をする。そしてこの方法が一番いいと主張を続ける。

B 民放もそれと同じことをやろうとした。たとえばTBSはTBS映画社に、12チャンネルは日経映像に同じ役割をやらせようとした。そのときATPは強烈に反発した。それで民放サイドはおそれをなしてやめてしまった。

C 中間にそんなものがあるという構造は日本独特のもので、アメリカやイギリスではそんなものは許していない。テレビ会社と制作会社が対等の立場で協力するというのはそんな意味だ。イコールパートナーとはそういう意味なのだ。番組をこういう風に作る、予算はこう、と詳細に打ち合わせて合意してつくる。中間の会社が勝手に下請けに出すなんてことはできないようになっている。

A 内容に対する責任も対等にとる。BBCがそれをやっているのにNHKはそれを模範にしていない。NHKの言い分としては受信料で番組を作っているから無条件に外部に委託できないということらしい。それでNHKの子会社を作っているのだが、それがまかり通るのは世界中で日本だけだ。

B この契約の形が始まったとき、ATPは三年間に限ってこの形を認めた。当時の川口NHK会長は「NHKの人間はプロダクションと直接話をすることを不安に思っている。この形がいい」と言った。ATPは「三年たてばNHKの人も馴れるだろう。それよりNHKが仕事を外部に出すことが大事だ」と認めた。こんな事態になるとは思ってもいなかった。

C BBCははっきりした理念をもって外部の制作会社と向き合っている。ドイツにはそもそも下請けという発想がなくて、放送局が外部に番組制作を依頼すると番組の著作権は制作会社のものになる。放送局は放送権料を払って放送する。この形は法律で定められている。

A 日本テレワークという会社はフジテレビが筆頭株主だ。東京と大阪は東京がキー局、大阪が準キー局という立場で、いろんな緊張関係があるが、関テレとしてはテレワークに丸投げしておけばそうとんでもないことは起こるまいとふんだんじゃないか。

視聴者をどう考えていたのか？

B 「あるある…」の制作者たちは誰に向かって番組を作っていたのだろうか？視聴者がどう見えていたのだろうか？ 視聴者の中には番組を見るとすぐ納豆を買いに行く人もいれば、テレビなんて信じないという人もいる、その間に無数の人がいるじゃないか。それを制作者はどう考えていたのだろう？

C 構成作家としては納豆を買いに走る人が多数であったことは快感だったとブログには書いてある。これは、芸能や大道芸の原点で人が多く集まれば成功なんだ。

A 大道芸は昔からインチキを売り物にしていた。

B しかし情報が生活の主役になってきたときは大道芸とは違うのだから、これを売るのにインチキでは許されない。

制作現場は視聴率としての数字だけ考えて、番組を見た人の人生にどんな影響を与えるかなど一切考えていないだろう。数としてしか見ない。勝ち負けでしか考えない。視聴率をとれば勝ち、という教育しか受けていない。だからそうじゃない、視聴率以外に考えることがあるのだとガン！と言わなくてはいけない。他の尺度でちゃんと評価する仕組みが必要なんだ。それは一人の社長でもいい。「これは視聴率は低かったが放送局が作るべき番組だった」と評価すればいい。信頼という哲学だ。

C ところがその社長が何かのパーティーでは「ゴールデン一位、全日二位」などと得々と喋る。 新聞も視聴率の高い番組を木曜朝刊にスペースをとり（朝日新聞）追いかけてはあおる。

A テレビ局の責任ある人が「こんな番組を放送したくはないが視聴率がいいから仕方がない」と言う。視聴率が高いことがエクスキューズになる。何でも許される。

B 番組の社会的影響について放送後の調査をしてほしい。見た番組について「誰に話したか？」「どんなことを話したか？」「相手はどんな返事をしたか？」を聞く、そんな調査だ。好感度や満足度といった主観的なものを調べることは実は難しい。そうではなくて視聴者の生活行動として具体的行動を調べると番組が社会に与えた影響がわかるはずだ。見た人は多いがすぐ忘れられる番組と広く社会的な影響を与えた番組の違いがわかる調査がほしい。

チェック機構はあった？

C しかし、納豆で食中毒事件が起こったわけではない、そうだったら様相は全く変わっただろうが…

A かつて紅茶キノコとかサルノコシカケだとかやったじゃない。それで大問題になったことはない。

B 今でも新聞には似たような広告が大々的に掲載されている。あれでも一応基準を守ってすれすれのことをやっているのだろうが…

C いや、法違反は多い。各業界に広告表現の規制はあり、医薬品に関しては厚生労働省からのこまかい通達がある。それを知っていて違反する。勿論メディアにも媒体としての責任がある。

A 考査部とか審査部は何をしている？

B 全部のCMを審査するわけでなく、CM部でのチェックで引っかかったものが考査部、審査部に上がってくる。新規の広告主の広告については広告審査協会に審査を依頼して、協会では例えば不動産については「駅から徒歩五分」は正しい表現かどうかを実際に検証している。

C　広告ではそれだけ厳しいチェックがあるのに番組にはない。

A　いや、ドラマでは台本を全部チェックして差別表現はチェックされる。

B　「あるある…」の構成台本にはアドリブとして出演者の発言や笑いの指定まで書いてある。

C　今、バラエティーの台本はつかみや流れにこだわっている。だから情報番組の台本チェックはやれば出来るんじゃないか？

A　外部でこの番組の批判の本が出たのだから、ちらっとでも中身を見て「こんなイチャモンがついてるけどこれは論外だ」とか「いやこれは気をつけよう」とかやるのがふつうなのだが、それもない。

C　一社提供だからスポンサー試写はあったのでしょう？

A　収録の時は花王も電通も来ている。花王は毎回ではないが電通は必ず来た。

B　一社提供というのはその社の命運を左右する。その番組でインチキをするのは大変なことなのだ。このスポンサーを裏切ってはいけないと考えるのがふつうだ。企業の社会的責任は最近非常に大きくなっている。そんなときに一社提供の番組でこんなことが起ったのは驚きだ。

研修機能を持とう

C　調査報告書や民放連の声明はいい内容のものだと思う。「ルールを守る」「研修」「教育」など、いい提言だ。

A　局はそれでやれるだろう。しかし小さなプロダクションはそんな余裕が無い。それが問題だ。流動性の高い労働マーケットだから社員は次々に辞めてゆく。そこにたいして教育や研修をするにはNHKと民放の双方がお金を出すしかない。ATPも少しは出せるだろうから、その三者で全制作者の教育、研修をすべきときにきている。

B　BBCは研修制度に対する最大の出資社で、受信料の中からかなりのお金を出して、研修機関に寄付し、フリーも含めすべての制作者に対して研修を受けさせている。物凄い受講者と日数だ。あれを見るとNHKの受信料が高すぎるとか払わないと言うのはナンセンスで、こんな時期にNHK予算の二割削減なんてとんでもないことだ。総務省や経済産業省はコンテンツ輸出国にしたいと言っているが人材を育てることがまずやるべきことで、研修に総務省は金を出すべきだ。

C　今、全制作者は四万人いると言われる。フリーターとか浪人とかわけのわからないような連中が仕事の意味もわからず放送の現場で働かされている。この全員に少なくとも五年に一回、十年に一回研修や再学習を受けさせる。テレビのジャンルは広い。中継を習うにも舞台中継からスポーツ中継、事件事故の中継まである。ドラマ、バラエティーまでマスターしようとなると物凄い時間がかかる。相当な金もかかるし、研修を受けないと現場の仕事は出来に仕組みを作る必要もある。フランスにはそんなライセンスの制度がある。

A　それには「放送人の会」が乗り出そう。全部とは言わないまでも研修制度の中核を荷なうと名乗りをあげよう。

B　制作会社はそれぞれ狭い専門分野に特化され過ぎてきて、全体を見通すオールラウンドな研修に接する機会がどんどんなくなっている。

C　だからどこかでやる必要がある。**「放送は内部崩壊の危機にある。われわれは手を拱いていられない。放送人の会でやる」**、と宣言して今日の座談会は終わりにしよう。

A　面白くなってきたぞ（笑）。われらはヒマな老人の文化サロンではないことをリクツじゃなく文化スキルの継承実践者であることを明らかにしよう。

鵠沼海岸から　24

名誉会長　川口幹夫

寄せては返す海岸の波打ち際に似て、どうやら人間の世の中は悪いことをくり返すものらしい。

折角きれいになって、もう汚いことは起こるまい！などと一安心している人間の心をアザ笑うように、またくり返される。

私自身が放送界の不祥事に直面したのは、平成四年の「ムスタン事件」である。NHK特集「秘境ムスタンをゆく」で数々のヤラセ事件が発覚したのである。私がNHK会長になってまだ一年たらずの時だった。調べてみると、功を急いだPDのやってはならぬ「ヤラセ」だった。

自らを罰するとともに二度と起こらぬよう、厳しい体制をとった。

――だが、その後もくり返して不祥事は続発している。民放でも――まことに悲しい。

今回は、民放での事件だが、またNHKでも起こるに決まっている！

なぜか。

視聴率を上げることが依然として放送界第一の関心事だからだ。

提案したい。全民放の社長さん、NHKの会長さん、皆一斉に声を大にして宣言して欲しい。

「日本の放送人は視聴率第一主義をとらない。視聴率は番組がよければ自然についてくるもの！われわれは結果を重視しよう」と。

一人残らず、民放の社長さんもNHKの会長さんも叫んで欲しい。

結果は――皆が闘志を失って番組が駄目になる――か？

否である。

視聴率にこだわらぬ制作態度からは、本物の優れた番組が生まれてくる。

放送人になって六十年、現場にいた私の言うことだ。信じてくださっていい。

私は、それを信じている。

第17回

名作の舞台裏

3月21日（横浜 情文ホール）

『のだめカンタービレ』（フジテレビ）

ゲスト 上野樹里（出演）
若松央樹（プロデュース）
武内英樹（演出）
司会 石橋 冠（放送人の会）

左から 司会 石橋冠 若松央樹P 上野樹里 武内英樹D

◇

名作といえば過去の栄光に包まれた作品と定義される作品をいうが「これって名作よ」と若い人たちが熱く語る現在進行形の「名作」だってあるはずだと「名舞」スタッフがあえて選んだ最近作の連続ドラマ作品。

上野樹里さん

といえば、ナンセンス・ドラマの骨格に若者にはとかくなじみの薄いクラシック音楽を融合させて、原作では出せない音の合体による映像の「漫画化」に挑戦して、原作を超える映像表現を生み出した作品。ちなみにドラマは、連ドラ対象のドラマ・アカデミー賞（角川書店）に輝き、上野はその主演女優賞と、併せ獲得している。

果たせるかな場内は新感覚のドラマを支持した若いドラマ見巧者であふれ、デフォルメされた映像処理の裏側を制作スタッフが明かし、なかでも話題は「のだめ」キャラについて天真爛漫に語る上野樹里に集中、さらにのだめオーケストラやのだめモデルにおよび、音楽描写部分で光るパート撮影の迫真力をギャグ化してまとめた演出上の苦心、また玉木や小出恵介、瑛太など助演とのからみなど、ファンがしりたい制作裏話を通してドラマの内実が具体的に理解された2時間だった。

（編集部）

ラジオの広場

第9回 放送人の世界
公開セミナー（横浜ライブラリー）
真銅健嗣～人と作品

真銅健嗣氏

初めてラジオドラマの制作者とその作品群を取り上げた。ラジオドラマ、特に民放では日常編成から消え、音声芸術の領域を守っているのはNHKぐらい。そこで今回は過去の名作でなく、同時代の話題の作品群を紹介することにした。真銅健嗣氏はNHKドラマ番組部でラジオドラマの専任ディレクターで、ここ数年の間に作られた作品の数々は注目されてきた。

＊　＊

第一日（3月10日）

青春アドベンチャー「光の島」

連続帯ドラマを集約したもので、沖縄の孤島にやってきた少年光が島の生活でたくましく成長する。再び島に帰った青年が少年期の島の雰囲気を回想する。効果音をいかしてみずみずしい情感で描いた作品。第41回ギャラクシー賞受賞。

FMシアター「夕凪の街 桜の国」

原爆にさらされた一家族をみつめた傑作と評価の高い原作漫画をサウンドドラマ化。8・6の原爆を合成音で奥深く表現、広島の悲劇がいまだに家族に深い影を落としている。

内面描写のたしかさでテレビを凌駕するサウンドの表現力が観客の想像力をかりたて、観客もドラマを聴く楽しさにひきこまれていた。

＊　＊

第二日（3月17日）

オーディオドラマ「古事記」

作 市川森一 出演 石坂浩二
戸田恵子 森繁久弥 江守徹ほか

国家創設を「古事記」口伝のかたちで繰り広げられた壮大なロマン。イザナキとイザナミの国生みからはじまる神々のエピソードを「テレビで企画したら億という予算がかかるが、ラジオなら音声効果でそれ以上に芸能表現にもおよぶ神話的世界の時空間をたのしませた」（今野勉）。

皇国史観のトラウマからタブー視された神話をエンターティメントに解放したラジオ80周年記念にふさわしい作品に堪能した。

FMシアター「カーン」

（平成15年度芸術祭ラジオ部門受賞

作 小松與志子）

ノラ犬を主人公とした擬人法で描いたラジオならではのファンタジックな作品。

今日、ラジオドラマを鑑賞する環境も習俗も失われかけている。集客も危ぶまれたが両日とも関係者、学生、一般人が参加しほぼ満員の入りで、ラジオ作品も企画が的確であれば充分に鑑賞、イベント化の対象になり得ると確信をもった次第である。

放送人グランプリ
下馬評座談会

X いろいろあるが、まずNHKスペシャル「**日中戦争**」はどうだろう。芸術祭ドキュメンタリー部門大賞受賞だ。

Y 日中戦争のプロセスはこれまでほとんど取り上げられなかった。これは新発見資料も入れてクールにしかも正確に事実を追求している正統派ドキュメンタリーだ。

Z 蔣介石の日記と日中両国の兵士たちの証言がベースになっている。秀作だね。

X ドラマ「**ハゲタカ**」がいい。タイムリーな「企業のM&A」の実態を情け容赦なく描いた迫力は凄い。

Y 経済はドラマの題材としては難しいとされているが、「ハゲタカ」は男たちの欲望と葛藤、挫折に焦点をあて、シャープで骨太なエンターテインメントに仕上げていた。

Z バブル崩壊後の海図なき十年、失われた十年が日本にとって何であったか、そこから何を学ぶべきでなのかという、非ドラマ的主題に挑戦したことに昂奮を覚えた。

X フジテレビの**横山隆晴、張麗玲**がノミネートされている。

Y 「白線流し」「小さな留学生」「櫻の花の咲く頃に」などのドキュメンタリー、そして「小さな留学生」の三人家族を十六年密着取材した「泣きながら生きて」の制作者だ。

Z プライム10「**この世界に僕たちが生きていること**」はどうだ？これも芸術祭ドキュメンタリー部門優秀賞受賞だ。

X 日々衰える腕の力をふりしぼって絵を描き続ける筋ジストロフィーの双子の兄弟とその母を密着取材した。

Y NHK「クローズアップ現代」の**国谷裕子**も候補にあげよう。華美な演出に頼らず、硬派、内容重視の番組のコアだ。放送人の会十周年の年にふさわしくはないか？

Z 元NBC・長崎放送の記者**伊藤明彦**は原爆被爆者の声を四十年にわたって記録してきた。彼が若い日に企画した番組は今も放送が続いている。組織を離れて命がけの生涯の仕事をしてきたことを表彰したい。

X 「**TBS新・調査情報**」はどうだ。「調査情報」は一時休刊したことはあるが、創刊時から自局のPRに偏することなく、粛々と発行し、放送界のトピックを取り上げてきた。その膨大な論考はとかく送りっ放しの電波業界の貴重な一次資料だ。

Y NHKアナウンサー**三宅民夫**も。NHKスペシャル「シリーズ・日本のこれから」の司会、「探険ロマン世界遺産」やドラマ「功名ケ辻」のナレーションなど誠実な人柄とあたたかい語り口が番組を支えていた。

X **大山勝美**もノミネートされている。永年にわたって放送人の会の育成・発展に努力したことを表彰しようというもの。

Y 青森放送の**伊奈かっぺい**も。彼はラジオ制作部、営業局」に本名佐藤元伸として勤務し、休日は「伊奈かっぺい」として多彩な活動を続けてきた。彼もこの四月に定年退職。彼の八面六臂の活動を評価したい。

Z 脚本家の**大石静**はどうか。「功名ケ辻」での手腕を評価したい。戦国時代を女性の視点から描いて、名だたる武将・政治家とその家族に独特の彩色をほどこして飽きさせなかった。

X いずれにしろ、以上あげた中からグランプリは生まれることになりそうだ。

Y 特別賞候補にNHKの**鎌倉英也**は？

Z 最初にグランプリ候補にあげた「日中戦争」のディレクターじゃないか。

X 「アジアと太平洋戦争　チョウ・ムンサンの遺書～シンガポールBC級戦犯裁判」「日本のいちばん長い日～昭和二十年・敗戦日記」「ノモンハン　隠された戦争」「パレスチナ　響きあう声～E.W.サイードの提言から」などの作品がある。現在も「探険ロマン世界遺産」の中で2006年にはクロアチア内戦に言及、今年はナチス・ドイツに破壊されたワルシャワを取材している。

Y **池谷薫**も。中国取材専門の制作会社テムジンですぐれたドキュメンタリーを制作してきたが「延安の娘」に続いて「蟻の兵隊」という傑作ドキュメンタリー映画を監督した。「蟻の…」は全国で自主上映中だ。原一男の傑作「ゆきゆきて神軍」を超えたと絶賛されている。

Z 中京テレビの**大脇三千代**ディレクターを推薦したい。調査報道ドキュメンタリーの作品でここ三年連続して民放連報道部門優秀賞を受賞し、今年度は芸術選奨・新人賞に選ばれた。彼女の作品である「消える産声」は、産婦人科医の減少に苦悩する地域医療の実態に踏み込み、規制緩和の実情を描いている。

X NHK仙台の「イナサ」がいい。

Y 映像、音声のスタッフは**村田英治、野本昌直**だ。太平洋と仙台平野に囲まれた「風の通り道」、半農半漁の集落にすむ人々の生活と表情を丹念に追い、静かに、美しく、心に沁みる懐かしさを呼び起こした。目に見えない「風」を描いたスタッフの労苦の結晶を讃えたい。

X NHKのアナウンサー**梅津正樹**。広範なリサーチにもとづいた「ことばおじさん」における現代日本語談義、「お元気ですか　日本列島」「ラジオほっとタイム」でのことばの話など、日本語ブームの中で個性的なコーナーを作っている。ウンチクだけでなく日本文化を言葉から洞察し、模索している。

Y 脚本家の**宮川一郎**。永年の優れたテレビドラマへの貢献だ。

Z 広告代理店ビデオプロモーションの**藤田潔**社長を表彰したい。「美の巨人」「世界遺産」「グレートマザー物語」などいくつかの局の作品の実質プロデューサーだ。これらの番組を維持してきたのは、彼の営業力、広告主からの信頼だが、その基礎にあるのは、いい番組を放送したいという執念だ。こんな代理店経営者があと何人かいれば、日本のテレビは絶対に変わる。

X NHKのBS特集「**民衆が語る中国激動の時代～文化革命を乗り越えて**」が素晴らしい。ようやく中国の民衆が日本のメディア取材にはじめて重い口を開いた。

Y BS番組ならではの長時間のインタビュー番組で、ドキュメンタリーというよりドキュメントそのものとして貴重な価値のあるものだと思う。

Z スタッフはNHKエンタープライズの**北川恵**、テムジンの**河本哲也**だ。文革の生々しい体験やその後の人生を語る中国民衆は実にしぶとく粘り強いが、取材スタッフも負けずに粘り強い。

X NHKのハイビジョン特集「**満蒙開拓団～国策が生んだ悲劇の記録**」も秀作だった。満蒙開拓団とは何だったのか、という詳細な記

録で、開拓の父と呼ばれた東宮鉄男についての新しい資料が発見され、番組を見ると当時の軍部に対する怒りを禁じえない。

Y　**加賀美幸子**アナウンサーを表彰しよう。「NHKアーカイブス」の司会、ドラマ「風林火山」のナレーションなど、現役時代と変わらない品格のある高いレベルの仕事ぶりは見事だ。最近の軽佻浮薄、興味本位の風潮に流されがちな現役アナにとって警鐘になるだろう。

X　NHKスペシャル「**ワーキングプア**」に一票。

Y　「その時歴史が動いた」の中の「**ベトナム戦争、戦場の真実を伝えたジャーナリスト**」にも感動した。放送人として教わることの多い番組だった。

Z　「**華麗なる一族**」のスタッフ**福沢克雄、石丸明彦**はどうだ。主演キムタク、著名な原作、華麗な出演者たち、常識を上回る制作費、成功して当たり前、だれもヒットを疑わない道具立てにひるまず堂々とわたりあい、期待以上の成果を上げた。

X　視聴率が高かったものでは、ドラマ「**のだめカンタービレ**」を高く評価したい。会報の別項の連載で磯村健二が触れているが、音楽番組、とくにクラシック音楽をテレビはどう音楽文化として考えているのか。その可能性のヒントを、とんでもない方向から、ヤングをひきつけて提案した功績は大きい。

Y　上野樹里か（笑）

Z　脚本家の**橋部敦子**。病もの、身障者ものドラマを一貫して書いている。関西テレビ枠で「僕の生きる道」や「僕の歩く道」だ。

X　だったら**草彅剛**もいる。その「…生きる道」の余命いくばくもない中学教師、「…歩く道」の自閉症の青年の演技にみる草彅、深夜放送で反響を呼んだ「チョナン・カン」も一票。韓国ではもっとも有名な日本人だ。

Y　フジテレビのカメラ。とくに「北の国から」組のカメラスタッフは群を抜いている。「拝啓父上様」など、夜景の見事な描写で「神楽坂」が素っ裸にされた。

Z　ラジオの候補者を少しあげよう。中国放送の**平尾直政**を推薦したい。原爆小頭症を追い続けているカメラマンだが、ラジオドキュメンタリー「燈燈無尽　ヒロシマを伝えたい」を演出した。最近は離島の小中学生とビデオで島を記録する「ボクらの島をドキュメント」を作った。

X　TBSラジオ　の「アクセス」のPD**友野律平**をあげよう。「アクセス」は1998年に始まったリスナー参加番組で、リスナーがナマの意見や見解をナビゲーター、コメンテーターやゲストにぶつける本格的な討論番組だが、他人への中傷を排除し、不適切な内容をチェックする体制も整っている。バランス感覚もいい。

Y　NHKラジオ第二の「**古典講読**」がいい。長い間、原典を抜粋でなく全編通して読み続けてきた。源氏物語、平家物語、枕草子、徒然草など。十九年度から中国古典に移る予定なので、長い間の、丁寧でわかりやすく、内容の濃い番組作りを表彰したい。

Z　長野放送の**宮尾哲生**を評価したい。FNSドキュメンタリー大賞「われに短歌（うた）ありき～ある死刑囚と窪田空穂」を演出した。四十年以上前に強盗殺人で死刑囚になった青年と歌人との交流を描いて、静かな感動を呼び起こした。

X　テレビ東京の**佐々木彰**ドラマ制作室長を推薦する。5時間ドラマ「李香蘭」（上戸彩主演）、「復讐するはわれにあり」など、総合プロデューサーとしての力量を発揮し続けている。

Y　日本テレビの水島宏明も候補だ。報道局解説委員兼NNNドキュメントのCDで、一貫して「社会の貧困」に照準をしぼり、取材・報道を続けている。2006年の仕事は生活保護に対する自治体窓口の実態を告発した「ニッポン貧困社会」、農薬散布により過敏症になった子供たちをとらえた「カナリヤの子供たち」など。

X　特別功労賞候補がいる。**実相寺昭雄**と**佐々木守**が他界した。

Y　二人とも多才な人だった。まだまだやらせたいことが沢山残っていて、実に惜しい。

Z　誰が選ばれるか楽しみだが、今回もきっと素敵な贈賞式になるよ。

（注・以上は会員アンケートを土台に座談会形式にリライト、再構成したものです）

日韓中テレビフォーラム
予備会議経過報告

今秋中国で開催される第七回日韓中テレビ制作者フォーラムの予備会議が、四月十二日から三日間、開催地・天津市に各国代表団が集まって行われ、日本からは当会の大山勝美特別顧問（日本組織委員長）と鈴木典之幹事（山田尚組織委事務局長代理）の二人が出席しました。

フォーラムは九月十二日（水）から四日間、天津市の経済開発地区に新設された五つ星の国際施設『天津国際ホテル』を会場とし、中国四大テレビ局の一つ『天津電視台』の全面協力を得ることが正式決定されました。

会議の構成・進行は前回の韓国・光州市大会に準じることとし、参加作品のテーマはドラマが「庶民生活」、ドキュメンタリーが「環境」、エンターテインメントが「児童」で各国が一ジャンル三本ずつ出品します。北京オリンピックを控えた中国側の要請で、特に「オリンピック精神とテレビ人の責任」を基調演説で触れることになりました。

天津電視台はフォーラム協力を創立五十周年記念事業と位置付け、ニュース中継や番組化も予定していて、予備会議の運営にも国際部局の若手スタッフが実習のため〝熱烈奉仕〟し、友好と交流も一気に進みました。

天津市は首都北京に隣接し、周恩来元首相、温家宝現総理の出身地とあって（江沢民国家主席出身の前回開催地楊州と同じように）市勢の伸張ぶりは目を見張るばかりで、現在、中国一を目指す港湾拡張と国際企業誘致で土木・建設ラッシュが続いています。歴史の古さと山も海も揃った立地の良さも自慢で、最終日の観光では、万里の長城の一角「水関」、唐時代の代表古刹「独楽寺」、清朝の「古文化街」などの名所案内がありました。毛沢東は「水関長城に登らずば一人前の男に非ず」と麓の記念館に揮毫しています。私は古希を過ぎて男になりました。（鈴木典之　記）

特集　まだまだ「現場」です！

（出稿順）

『マグロ』（テレビ朝日）

石橋　冠

二夜連続5時間という長尺。しかも主人公と巨大マグロとの壮絶な死闘がクライマックスであり、それが売り物という企画であった。

魚は好きではなく、体力も落ちてきたので正直なところ逡巡が先立った。いきさつはともあれ始まってしまった。まあ、これで斃れてもいいやという居直りだけが湧いた。

ともあれクライマックス。

大間では常時臨戦体制を敷いた。八十隻のマグロ漁船の協力を得ていたので、マグロがかかり次第、すぐ急行してマグロのかかったテグスを主人公が乗ってる劇用船に貰い受ける手筈だった。劇用船、客観カメラ船、警戒船にカメラを7台設置し、スタッフは救命胴衣を着装して待機していた。

天海祐希　渡哲也

西落事典
まぐろ「鮪」サバ科マグロ属のサカナをさす。まぐろと言っても真黒ではない赤身をひけらかす大魚をいう。

しかし、現実は厳しかった。何回かのチャンスは、ことごとく挫折してしまった。マグロに逃げられたり、銛が急所を打って殺してしまったり、釣ってみたら小さかったりと散々で、第一次ロケは鬱屈した気分のまま撤収。

十一月、再びトライした。この季節の津軽海峡は波が高く、撮影はさらに困難を伴った。それでなくとも、マグロのために肝心のドラマ部分の撮影スケジュールがきつくなり、焦燥感が募る一方だった。

倖い、スケジュールが押し迫った頃、三頭の巨大マグロがかかり、やっとクライマックスを成立させることができた。よくぞ撮りきれたものだと思う。連日小さな船の上で命綱にしがみつき嘔吐したり、跳ね飛ばされたり全身に波をかぶったり、それを耐えたスタッフの健闘に今でも頭が下がる思いだ。

終わってみると、ドラマを演出したという感慨よりも、格闘技に戦い勝ったというスポーツのような達成感のほうが強いのに戸惑っている。

マグロ漁に精力を集中するあまり、大切なドラマの演出がいまひとつ緻密さに欠けたという自責の念にうなだれ今も悟り損なった心境にある。貴重な体験だったが、次の機会には身の程をわきまえようと自戒している。

大間　青森県下北半島に位置し、北海道の山並みを北に仰ぎ、津軽海峡を隔て北海道の最短地点である函館市汐首岬とは17キロの、鮪の一本釣り漁で知られる本州再北端の町。

『愛の流刑地』（映画）

鶴橋康夫

突風や花吹き上げる花の中
逃げ場なき戀の柩は蝉の穴

鶴橋康夫監督

桜満開の栃木で『愛の流刑地』の最終上映を観た、豊川悦司と。

「終わったな」

「ええ」

「世話になった」

「こちらこそ」

何ヶ月も、主演の彼と全国を回った。宣伝という巡礼の旅だ。最後を確かめたくて、ここに来た。映画館の前で出てくるお客に深々とお辞儀をした。

この仕事を受けたとき、寺島しのぶを道ずれに豊川と心中だと思った。

道行きは終わった。ほっと安堵の吐息というところか。

豊川悦司、この青年は美しい。輪郭にたるみがない。きわだってシャープだ。容姿だけをいうのではない。その所作ふるまい、在りようだ。棒高跳びのブブカが、風と交渉し、空と対話してバーを跳ぶように、〃女〃との出会いから扼殺までの、次々に高く上がるバーをクリアした。

「愛は裁けない。全てが違う！」と叫ぶ目つきはテロリストだ。この目が映画界全体をを見渡し、負わされた責任に燃えているようだ。ぬかるみをハネ一つ上げずに跳ぶ彼の美しさあっての『愛の流刑地』だった。

相手役の寺島しのぶは、綺麗な布で張ったいい匂いのする箱だ。蓋をとると、なにかもうひと回り小さい箱が入っていて、都合五重ぐらいの最後の蓋をとると、中から全裸で現れてきそうだ。豊川、寺島のコンビは絶妙だ。合った。惹かれた。共振した。なにもかもがいいといっている。そのときめきがどの場面でも、途切れることがなかった。時に高く飛翔して空に溶けるほどに。

かつて怒涛のようにテレビに参入した映画人が、ことあるごとに「本編はさあ」と口にした。「俺たちは予告編か」と反発したスタッフが、突然僕を「監督」と呼びはじめた。それまでは「ディレクター」か「鶴さん」だったのに。一生テレビ馬鹿でいいと思っていた僕は、なかなか馴染めなかった。

母の忌も草餅買って済ませけり
孫が泣き膨れ上がりし蒼き空
目を剥きて歯をむき鮭打たれけり

［キャスト］

村尾菊治　豊川悦司
入江冬香　寺島しのぶ
織部美雪　長谷川京子
入江　徹　仲村トオル
脇田俊正　佐藤浩市
北岡文弥　陣内孝則

製作プロダクション　東宝映画
製作　「愛の流刑地」製作委員会
東宝／日本テレビ／読売テレビ／幻冬舎
電通／東北新社／日本経済新聞社

『李香蘭』（テレビ東京）堀川とんこう

～四月にロケ地を再訪します～

去年の秋三ヶ月近く滞在して、いい加減うんざりしていたはずの上海へ、今月遊びに行きます。『李香蘭』が体のなかでアトをひいてる感じなのです。或いは、上海が、まだ中国が腹にもたれているのかもしれません。

撮影のための滞在では毎日オープンセットと宿舎を往復するだけだったので、中国は視界の隅にチラッと見えたに過ぎません。

いま中国では何かとんでもないことが起きている、とは感じるのですがよくは見えない。僕が腕を広げて大げさに「どこが社会主義だよ！」と通訳たちにいうと、彼らも負けずに腕を広げて「わからな～い」と言ったものです。

歴史の変わり目には人をワクワクさせるものがあります。ウオッチする価値があります。

上海を行くスター時代の李香蘭（上戸 彩）

『李香蘭』の山口淑子さんが生まれ育った満州も、日本国の運命を決した重要な場所でした。でも僕たちの世代は満州を知りません。昭和前半の歴史は日本の犯罪史だという感じを抱いてるせいか、学校でも教えないし自分も避けてきた憾みがあります。あわてて満州の勉強をしました。おもしろい。そして、怖い。

山口淑子は、中国人としての教養を身に付けるために、日本人であることを隠して北京の女学校を出ました。バレないんですから語学の天才です。学校では抗日運動が高まってきます。李香蘭のなかに二つのアイデンティティができてしまう。この辺が李香蘭の一番おもしろいところですが、テレビではなかなか――。戦前の日本で李香蘭が大人気になったのは、征服者のクーニャン趣味ですから、本人は複雑だったでしょう。

上戸彩ちゃんの李香蘭。想像の数倍よかったと思いました。最初は「とうとうアイドル物までやることになったか」という感慨もありました。が、彩ちゃんは並外れた集中力で撮影中にどんどんうまくなった。顔つきも変わりました。本格派になりますね。

監督が「植民地国家に咲いた徒花が、自我に覚醒する物語だ！」とか言うのはわからなかったとおもいますが。

上海周辺の巨大なオープンセット群は、撮影意欲をそそります。ここで凄い数のテレビや映画が作られていて、よく中国チームと隣り合わせになり、わが中国スタッフは「アンジン、アンジン（安静＝静かに！）」と叫びまくっていました。テキはほとんどがアフレコ撮影なので騒音に無神経なのです。

上海はやがて、映像の世界的な産地になりますね。金閣寺を立てる話もありました。紫禁城がまるごと建ってるくらいですから、金閣寺もたてちゃいますよ。

『赤い鯨と白い蛇』（映画）

監督　せんぼんよしこ

（記　松尾羊一）

景色は房総。戦時中住んでいた古民家に認知症気味の香川京子がいる。大切な記憶がどんどん薄らいでゆく自分を悟り、静かに耐えてる「老女」をめぐり、彼女を取り巻く女たちや少女は人知忘却の奥底を計りかね、その姥母にじょじょにからめ取られていく・・・

映画は、人々が醸し出す苦いユーモアを静謐な計算と空気感でつつみこむ。まるで文学座初期の演目にあったような一幕物のシチュエーションを彷彿させる演劇的な映像構成。夕闇に消える赤い鯨（潜水艦）に象徴される気韻生動の気配と人間存在の賛歌を暗示する終章の祭りシーン（脚本 富川元文）。

安易な反戦劇ではない。浄土往還の問いを白い蛇に託して現代説話に置き換えてみせる監督のさばき。苛烈な時代に記憶をつなげる老婆。そのせつない鎮魂の劇が訥々と訴えかけてくる。

ふと思った。若いころは気心あった仲間たちと映画の帰りに喫茶店でよくダベった。映画評論家になったつもりで演出がどうの、役者がうまいのヘタのと。青い議論に食い散らかされ、せっかく見た映画がボロボロになり・・・

歳をとると別のことを考える。

絶対音階というものがあるように、もしかすると「絶対音感」とでも呼びたいような、祷りの境地に導くような屹立した映像というものが存在するんじゃないかと。

せんぼんよしこ監督は、成瀬巳喜男小津安二郎、溝口健二、黒沢明という巨匠たちの掌中で鍛えられた〝お嬢様スター〟のその後を40数年間もじっと待ち続けて今、異界と交信する老巫女像に会心の彫塑を果たし得たのだと。

＊

さて、『赤い鯨と白い蛇』以外にも前掲のようにテレビ出身のOBクラスの演出家の作品が目立つ。映画では鶴橋康夫の『愛の流刑地』、テレビでは石橋冠の『マグロ』（テレビ朝日）、堀川とんこうの『李香蘭』（フジ）と大作、力作が続いた。じつは『マグロ』も『李香蘭』も下高井戸か三軒茶屋の小屋で映画サイズのプロジェクターV方式で見たかった。『愛ルケ』をまだ見ていないのも有楽町でOLたちの溜息にかこまれるよりムーヴ・オーバー（下番線）におりてくるのを待っているからだ。まばらな観客にひっそり身をおき、生と死をめぐる性の物語に浸りたいからだ。

（「GALAC」より転載、加筆）

『新刊紹介』

記　松尾羊一

『私説　放送史』　大山勝美著

副題に～「巨大メディア」の礎を築いた人と熱情～とある。居ながらにしてテレ（遠くを）ビジョン（観る）装置にたいして、送り、作り、売る側は免許事業をふまえ、どのように対処していったか。放送史といえは松田浩氏などの業績があるが、制作現場の目から鳥瞰し、かつ虫眼的に描いたメディア同時代史の構成をとる書だろう。

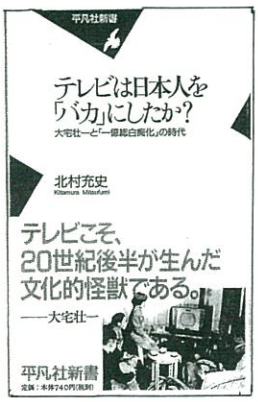
草創期のさまざまな現場のエピソードに触れ、〃おもしろい話〃の背景が意味するものに終始こだわって書き綴る。そこが放送制度やマスコミ倫理、海外メディアとの比較文化、経営事情に分断し、分析する既成の書とのちがいがある。集団のクリエイティブな志しを通して着地し、発信する活動に「個人」がどのようにかかわっていったか、渦中の証言者として続、続々の「私説　放送史」刊行を期待したい。

（講談社　1900円）

『テレビは日本人を「バカ」にしたか？』　北村充史著

大宅壮一の造語だとされる流行語「一億総白痴化」を吟味し、まずそういわれた草創期に現実をいじり、加工した番組事例と当時の識者の反応を終始分析する。テレビが伝えることはホントかウソかの単純二元論からはみ出てしまうテレビ特有の生理と感覚による演出領域をどう判断したらいいのか。「電気紙芝居」にむしろ甘んじて「視聴率」の〃神〃に拝跪するレジームは今でもかわらない。むしろからめとられてる。「一億総白痴化」を逆説として首肯するゲームは終わるどころか、行き先不明のままに漂流している。その航跡を当時の文化人や識者のテレビ観をクロスしてあぶり出す。「一億総博識化」はともかく、「楽しいだけがテレビじゃない」テレビのありかを考えさせる水先人の書である。

（平凡社新書　740円）



小説『ごみを喰う男』　中村敦夫著

ゴミ処分場建設をめぐる行政と反対市民の軋轢の中で殺人事件が起こる。主人公は地元の禅寺の住職法舟で多摩川にうかぶ死体事件に巻き込まれ、解決に乗り出す。推理小説の骨格をかりて権力と住民、公安と刑事などの警察の構造にも触れてゆく…

中村敦夫（会員）といえば「木枯し紋次郎」だが、「地球発22時」（毎日放送、TBS系）の番組枠騒動も覚えてる。84年に「ニュースステーション」（テレ朝）に対抗してTBSは「森本毅郎のプライムタイム」をぶつけた。そこで「地球発23時」は土曜日に移行し、まもなく「土曜ドラマスペシャル」が入り、今度は「地球発19時」ときた。度重なる時間帯移動に頭にきた中村敦夫さん、「俺は、電波芸者じゃない！」と怒って降板。放送界の「よくある話」がもとで政界を志ざす。のち「みどりの会議」代表を経て政界を引退。その間『チェンマイの首』などハードボイルドタッチの社会小説に手を染め、「ごみを食う…」は、もし「環境文学」の分野があれば、その流れにある作品だとしている。2Hドラマ枠でドラマ化したら？と思わせる作品。

（徳間書店　1700円）

『一人ひとりのマスコミ』　小中陽太郎著

ただただ呆然として聞くっきゃない。こっちは相手の口先を眺め聞き惚れ、話を肴に酒を楽しむ。世の中、仕方咄し（別名バカ話）という喋り口の名手がいるものだ。昔取材でよくつきあった加太こうじのおっさんがそうだったが、今は鶴橋康夫とこの小中陽太郎だ。この本は、小中陽太郎という、まさに〃ひとりのマスコミ〃が主に60年代から70年代を駆け抜けた軌跡をたどり今にいたる構成になっている。NHK、ベトナム反戦、多様なサロンの人びとと交友の記録、それにしてもテレビよ、お前は、とあたたかく問いつめる、それらの語り口。折りにふれていい意味で書き飛ばしたエッセーや論

攷が凝縮されると一つの時代稗史に化合し、「通史」には無い斜光による戦後昭和の魅力を放つのである。

（創森社　１８００円）

『久世光彦の世界　昭和の幻景』
責任編集　川本三郎　斎藤慎爾

出版界ではひそかに「久世光彦全集」が企画されていると聞く。毎月一冊は上梓した旺盛な筆力でテレビから（そして文壇からも）ややはみ出た「個性」の足跡をたどる、一周忌を記念した遺稿と交友の回想で綴られた書。その「活字」と「映像」を行き来する因縁の人びとのエッセーの中に、個人を知る大山勝美、鴨下信一、松尾羊一らも原稿を寄せている。

（柏書房　２２００円）

編集部より　会員の皆様のなかで近いうち著作を出版されるか、あるいは自費出版があり、論文やエッセーを雑誌などに発表された方、ご一報下さい。会報で紹介させていただきますので。

題名のないエッセイ（放送音楽私史）最終回「音楽番組は何処へ行く？」

前回までに、私が影響を受けた大先輩の音楽プロデューサー達のことや、三十年近く携ったお化け番組「題名のない音楽会」、視聴率競争の嵐に巻き込まれた「ベストテン番組」のことなどを恥ずかしげもなく書いてきた。自分史であるならば、ゴールデンでのクラシック音楽番組としては、多分、最高視聴率、８．３％をゲットした「伝説のピアニストＶ・ホロヴィッツ／ロンドン・コンサート」（テレビマンユニオンとの共同制作、一八八三年）、「東西ドイツ統一記念番組～ベルリンより歓喜の歌声」（ベートーヴェンの「第九」の国際初衛星生中継、一九八六年）、「朝までモーツアルト」（モーツァルトの四十一の交響曲全曲演奏会、ＨＤ収録、一九八九年）などは想い出深い特番であった。又、特に親しくしていただいた故人の音楽家諸先輩、山本直純さん（作曲・指揮）、宮川泰さん（作曲）、ラテンバンド・ノーチェ・クバーナのバンマス・鉄仮面こと有馬徹さんや民放でのクラシック番組制作の戦友・油井慎次郎さん（元・日本テレビ）たちとの交遊録には珍談、奇談も多く、詳しくご紹介したいところだが、連載の最終回としては割愛し、少しテレビの音楽番組全体に対する私見を述べて退散させていただくことにしたい。

民放マンとしてはかなりの本数のクラシック音楽関連の番組を担当した私が常に疑念を抱いていたことがある。それは「テレビの音楽番組とは何だろう？」という素朴な疑問。「ライブの臨場感をいかに伝えるか」「演奏会では見ることが出来ない演奏家の素顔やテクニックの秘密」「映像と音の融合」「音声多重化時代の音楽番組」といった課題に挑戦して来たつもりだが、力不足もあって、一度も自己満足の域にすら達したことはなかった。

「報道」「ドラマ」「ドキュメンタリー」「バラエティー」、隣の芝生がうらやましかった。映像主体のテレビにとって、音は単独で生きられない。常に映像の女房役、引き立て役としての存在感、重要性。セリフのないドラマ、音楽のないドキュメンタリーは演出方法の逆説の世界でしかない。映像が持つリアリティー、文字の持つ情報伝達性（一面的な捉え方ではあるが）に比較して、音、特に音楽は「情緒性」「想像性」の表現能力に優れているのにもかかわらず…

すでに、ドラマやドキュメンタリーなどジャンルでは、明らかにテレビ的なスタイルを確立されている。それに比べ、テレビ・ミュージカルの確立にまい進された先輩達、日夜苦闘を続ける後輩諸氏には失礼ながら、音楽番組の場合は、テレビ創成期からの進化、変容は殆どないと言っても過言ではない。「シャボン玉ホリデー」「ゲバゲバ９０分」などのバラエティー番組がその返信と見ることも不可能ではないだろうが…

「ＢＳは全て見せる」、「インターネットとの融合化」、「多チャンネル化」、「ながら族」「テレビ離れ」これら新旧のキーワードの中にヒントがあるのか？それとも現代人にとっての音楽とは「癒し、慰め」「オタク」「ＢＧＭ」「孤独からの逃避」にますますなっていくのであろうか？

もしかすると、私の精神分裂的音楽番組論（？）の解決への最大のヒントは、作曲家・黛敏郎さんが作った「題名のない音楽会」モットーの中にあるのかもしれない。

『あなたは音楽が好きですか？
嫌いですか？
音楽がなくたって人生を楽しく生きていけると思っていますか？
この番組はそんなあなたに贈る番組です。』

（磯村健二）

「放送の緊迫を考える会～坂上香さんを囲んで」無事開催のご報告

「放送の緊迫を考える会」が、四月七日（土）、テレビマンユニオンの会議室で、午後二時半から五時半まで十五人の参会者で行われた。

ゲストは坂上香さん。坂上さんは米国での留学から帰国し、ドキュメンタリージャパンに入社、ＮＨＫＴＶで「女性の国際戦犯法廷」をテーマにドキュメンタリーを企画、制作した。ＮＨＫ側によりこの作品が意に反した修正を施され放映された。

坂上さんからは問題となった作品制作の実際や問題点など貴重な話が伺えた。活発な意見交換も行われ、現在の放送の問題を考えるヒントも多く得た。参会者も久しぶりの会員など多彩で、またやろう、の積極的な声もあった。（記・　石井清司）

放送人句会

西川　章

放送人の会で俳句会を立ち上げたらどうかと、かねてからいわれていたが、ようやく実現した。

三月二十七日午後六時過ぎ、赤坂のそば屋麦屋の離れに放送俳人たちが集まった。石橋冠、伊藤視郎（雅浩）、今野勉、新村もとを、堀川とんこう、松尾馬笑（羊一）、ゲストの俳優市村直樹の各氏と西川阿舟（章）の八人である。急用で来られなくなった田澤正稔氏と大山勝美氏はメールと電話で投句するという形で参加した。

句会は初めてという人もいたが、普通の句会のやり方で、先ず参加者は自分の作った句を短冊状の用紙に書いて「投句」する。それをよくかきまわして数句ずつ半紙に清書する「清記」を行う。こうして作者の筆跡が消されて誰の句かわからなくなるのだが、この清記された数枚の紙をぐるぐるとまわして読みながら「選句」を行う。そして自分の選んだ句を発表する「披講」。自分の句を読まれた人は「名乗り」を上げねばならない。こんな風に句会は進んでいく。これらの作業は、それぞれビールやワインや焼酎など好みのアルコールを飲みながら、麦屋の料理を食べながら和気藹々のうちに行われた。

参加者のうち、石橋、今野、市村の三氏は今回は投句はせず、清記、選句と披講の場面に参加して貰った。

さすが表現に携わってきた放送人たち、俳句が面白いのは勿論のこと、その批評が又面白い。

以下に当日の句を紹介しよう。因みに兼題は「春雨」「踏青」「燕」。

青き踏む磯辺に青き女下駄　とんこう
春雨を肩でいなして女来る
葬列を追いこしてゆく初つばめ
春雨や剃刀の刃の捨て処　もとを
脚結びいつそ死なうか春の雨
青き踏むシャボンの匂ふ少女消ゆ
つばくらめ飛び抜けきるか間氷期
青き踏む若き女優の半ズボン　視郎
剣豪を夢見し日々や燕飛ぶ
春雨や赤坂芸者人力車
春雨の雨足見ゆる眼鏡橋
空を切る燕の群に嫉妬して　馬笑
くさめして踏青早き酒二合
春雨や背中丸めて五十肩　勝美
踏青や空を穿つて凧ひとつ　正稔
海に立ち燕返しに青を切る
棟上げの祝詞たけなは初燕　阿舟
初島は指呼の間なり青き踏む
訳ありの二人春雨傘のうち

次回「放送人句会」にはさらに多くのみなさんが参加されることを期待します。

次回「放送人句会」
◇五月二十九日（火）一八時半～
◇場所…赤坂「麦屋」
（電話〇三―三五八六―九七五四）
◇兼題…さくらんぼ、鱚（きす）、卯浪

第5回　会員セミナー

ミニシンポ
『重村一さんを囲んで』
～地上から見たホシ
ホシから見た地上～
世話人　中澤忠正

このタイトルにこめられた寓意性にいま揺れている「放送業」なるものの特異な生態がある。放送と通信を経営的な、同時に現場的な視野から実感論を展開。放送事業をNHKと民放をふまえ、ことの本質についてフジテレビというより、今や全民放、放送界が送ったエースが語る2時間。この人選が好奇心を呼び、サロンは十六名の会員が集まり、盛会であった…。

まず氏は〝スカパー時代〟の経営実感から入り、「放送帯域がたくさんとれるデジタルになっていくつもの放送局ができ、なおかつ必ずお金をはらって見たい人がひかえてる。テレビ局は最低でも（視聴率）を2ケタとらないと商品にならないが、われわれは2％の人が金を払ってくれれば充分に採算がとれる」として、集中と統合をくりかえしいまや時価総額では放送局を凌駕するまでになった通信産業の現実から説き明かす。

ついで、視聴率的には「2％の論理」がなぐりこみをかける多様な新情報産業にかかわる社外重役陣の真剣さと比較するときLFを起点として再び放送現場に帰っていま思うことがあるとして警告を発する。

「放送局は安泰だと、放送局が潰れるという恐怖というをもっていない不思議な業界だ」として、経営にたずさわる者も従事者もふくめ、放送が免許事業の特異な条件下でいかにあぐらをかき続けているか、現状を深刻にうけとめる必要があると、最近の度重なる不祥事の事例から、その受け取り方にしても、率直に言って危機感があまりにもなさ過ぎるという。

「ある時期、民間放送は一斉に株式会社化に踏み切り一部上場を果たした。しかし、そのことが深刻になにを意味をするか、したか。なぜ新聞社が、その大半が株式化を拒否し、自立運営で明治以来臨んできたか。自由な表現をめざす媒体にいったい、株主はどうかかわるのか。視聴者にしても消費者ではない。いまそのことが問われている」

話題はNHKの経営、民放のスキルの伝承にまで及び、また制作体制（下請けと孫受けの構造）にみる局側とのパートナーシップの欠落、前近代的な契約、そもそもそこには経営哲学が不在である。

氏特有な温厚な表現で迫ってゆく。社会の常識よりウチむきの常識がまかり通る業界、外部の血を入れない、チェック機能をもたない放送業界に未来はないと力説して終わった。

3月8日　新橋クラブジャパンにて

世話人の弁　「今後も放送人の会の会員を眺め、これはと思う業績と問題意識をもっている人物を選び、囲み、談論風発の気軽な宵を企画して参ります。ぜひともご参加ください」

（次回は消夏を期してゆかたがけの会予定）

放送人の証言 18

久野浩平

今回はテレビ美術部門の先駆者の方々にしぼって証言を集めました。

最初は **坂上健司** さん。一九五五年テレビの開局を前にしたラジオ東京（現TBS）にデザイナー・美術進行として入社します。河野国夫さん門下の装置家の坂上さんはそれまでの二年間は無手勝流でラジオ音響の仕事をしていたそうで、面白い話です。効果音はラジオドラマにとっての照明であり装置だったのかもしれません。

当初は書き割りの屏風でしかなかったセットが時代劇、コメディー、音楽番組などにおよび、急速に進化した美術の歴史、それに伴い持ち道具、小道具、出道具、花屋、キエモノ、植木、書き物、特殊効果と様々な部門が細分化した過程を語ります。圧巻は五八年岡本愛彦さん演出の「私は貝になりたい」「いろはにほへと」の装置の場合で、巣鴨拘置所のセットハンティングの話題などは興味深いものです。

「小道具担当がね、そう、下駄だ、それをなんべん持って行ってもってウンといわないって。杉村（春子）さんがそんなことでゴネルわけはない。どうやって持ってってったの。五足持ってったって言うから、そりゃ駄目だ。二つ持ってどっちにしましょう。でも三つ持っていったら駄目だよ。ごちゃごちゃしちゃって迷う（中略）二つ持っていけば決まる。こっちがいいわって」

続いて同じく「私は貝になりたい」「いろはにほへと」などで装飾担当の **吉沢保** さんの「証言」です。五八年アートディレクター一期生としてKRT（現TBS）に入社。工作場で紙粘土を使ってハリボテの灯籠を作ったりして初めてついた番組が「私は貝…」でした。主人公清水豊松（フランキー堺）が十三階段を昇るラストシーンにはADもカメラも照明も美術もスタッフは涙、涙で、輝かしいテレビの未来を確信させる感動的なスタートだったのです。その岡本さんの思い出、八木恵一、三林亮太郎、坂上健司さんたち先輩デザイナーとの仕事、アートディレクターの職能、東通美術、アックスの育成、美術予算の変遷など多岐にわたります。

「裏方ってのはね、ひっこんでると何もわからない。といって出過ぎるとね、裏方じゃなくなって却って迷惑をかけちゃう。つかず離れず居て何ていうか、洞察力っていうか、ひそかにスタンバイしてる気持ち。それがないといざという時に役に立たないのよ」

石井康博 さんは五七年NTV入社、五人目の美術デザイナーでした。織田音也さんに師事、新派の舞台装置を勉強していました。石井さんの「証言」では、大道具は基本的には俳優座に発注していたが社内にも棟梁、背景画家を抱える程度の製作を行っていて大道具飾りこみ専門のスタジオ班という組織があり、やがて美術進行に変身していったなど、NTV独自のシステムを語ります。ドラマだけでなく歌謡曲やコントなどの番組も数多くこなした石井さんですが、最も印象的だったのは「愛の劇場」をはじめとする、せんぼんよしこディレクターとの仕事だったと。せんぼんさんとは早大の同期生でした。また、旭ガラス提供のドラマでセットをオールガラスで作り、中で俳優が仮面を被って芝居する前衛劇などは、一度見てみたいと思わせます。

悲しいことに石井さんは昨年九月逝去されました。

合掌。

「（せんぼんよしこさんは）アップのゴリオシなどと言われたくらいでセットデザイナーとしてはちょっと抵抗があった。それでいて時々バシャッと大ロングを撮るんです。だからどんなセットを組みゃいいのって（略）ま、同期ですから言いたいこと言いあい、ケンカもしましたが、そんなこともありましたねえ」

原恒雄 さんは俳優座大道具部門のベテランです。俳優座は大御所伊藤喜朔氏の指導にはじまり、NTV、NET（現テレ朝）のほぼ全てのセットを供給していました。テレビスタジオのセットと映画や舞台の装置との差異、普通の大工さんとも違う大道具の棟梁たちの独自性や感覚を語り、各局で異なる平台の寸法、ハコウマの形の違いや使う絵具の変化など具体的に触れますが、開局当時は大道具の経費などは原価計算無しでトラック一杯いくらで決めていたなど、今では信じられない現場を語ります。

「ま、舞台も徹夜はありましたが、あれほど年柄年中てのはないですね。一ヶ月で十日ぐらいですか、家に帰ったのは。あとは局に、ええ、ホリゾント裏でよく寝ていましたよ。苦にならないのは高揚していたのか、ええ」

最後は **神山繁** さんです。五十三年テレビ開局直前のNHKにメーキャップ要員として入局。最初は「とにかく塗りたくって」出演者のハレーションをおさえるのが仕事でした。志ん生さんの頭は全部塗らなくてはならない、淡谷のり子さんのアイラインは外してもらいました。しばらくして映像も安定し、台本を読んで役柄に適したメークを考える本格的な美粧の時代が来ました。五九年、神山さんは開局準備中のNETに移籍、「証言」では化粧室の設計、メーキャップ技術の養成について、「徳川家康」「長い坂」など担当した番組の思い出が語られます。乙羽信子、大原麗子、佐久間良子、司葉子、三益愛子、水谷八重子、森光子さんなどなど、化粧室でみせる女優さんたちの素顔がさりげなく語られているのも微笑をさそいます。

「（草創期は）俳優さんはね、従順なんです。俳優さんは（テレビが）わかんない時代です。中でも一番こちらの言うことを聞いてくれたのが歌舞伎の方々。あのう歌舞伎のことは分かってもテレビはわかりません、よろしくお願いしますって、マエこうやって向かれ、お辞儀され宜しくだって。困っちゃいますよね、隈取りひとつこっちは何もわかんないわけですからね、そんなことがあってこっちも（歌舞伎を）勉強しましたよ」

◆ 会員だより

「子供の雑誌」は結構あるが考えてみると「大人の雑誌」が在るようでない。川口幹夫さんが編集顧問としてかかわっている季刊誌『にぎやか談話室』を戴いた。各界の趣味人が自分語りで「そういえばこんな話が…」と語りかけてくるようなまさに大人同士がよりそうような雑誌で楽しい。名誉会長が毎回、巻頭エッセーを書いておられる。全頁アート紙をつかった贅沢な雑誌。

5月12日(土) 午後2時より　於 青山荘会館(表参道)◎ 総会・グランプリ贈賞式・レセプション

会員名簿

，07・4・20現在

(あ) 合川明　青木裕子　赤井朱美
秋田完　新井和子　有馬哲夫
(い)
石井清司　石井ふく子　石井彰
石高健次　石橋冠　磯野恭子
磯村健二　市岡康子　一色伸夫
伊藤雅浩　井上良介　岩澤敏
岩下恒夫
(う) 上田千秋　碓井広義
歌田勝彦　宇野昭　浦田彰
(え)
江口展之　遠藤利男　遠藤ふき子
(お)　大蔵雄之助　太田敬雄
大野木直之　大西康司　大西文一郎
大原誠　大原れいこ　大山勝美
大類啓　大脇明　岡弘道　岡崎栄
岡田晋吉　緒方陽一　岡村黎明
沖野暸　荻野慶人　小田昭太郎
小田久栄門
(か) 加賀美幸子
各務孝　片岡敬司　片島紀男
勝部領樹　加藤滋紀　加藤静夫
金沢敏子　兼歳正英　金平茂紀
加納孝夫　上安平洌子　鴨下信一
河合　肇　川口和久　川口健一
川口幹夫　川竹和夫　川平朝清
河邑厚徳　河村正一
(き) 岸田功
北川泰三　北川信　北出晃
北村美憲　北村充史　木村栄文
木村成忠
(く) 楠美昌
工藤英博　隈部紀生
(こ) 小池勝次郎　河野尚行
児玉久男　児玉孝光　後藤和晃
小中陽太郎　小南武朗　近藤晋
今野勉
(さ) 斎藤伸久　斎藤秀夫
斎明寺以玖子　酒井美樹男
寒河江正　坂元良江　桜井均
桜井元雄　迫田朋子　佐々木欽三
佐々木彰　佐藤秀山　佐藤年
佐藤利明　沢口真生　澤田隆治
沢田隆三
(し) 重延浩　静永純一
渋谷康生　嶋田親一　清水満
下重暁子　習田豊　城菊子
(す) 菅野高至　杉澤陽太郎
杉田成道　鈴木克明　鈴木昭典
鈴木道明　鈴木紀郎　鈴木典之
須磨章　せんぼんよしこ
(そ) 曽根英二
(た) 高島秀之
高橋一郎　高橋啓　滝大作
武谷雅博　田澤正稔　田中昭男
田原英二　田原茂行
(ち) 千葉勉
(つ) 露木茂　鶴橋康夫
(と) 土居原作郎　戸田桂太
外崎宏司　富永卓二　土門正夫
(な) 中崎清栄　中澤忠正
中島僚　中田美知子　中谷英世
長沼士朗　中村敦夫　中村克史
中村季恵　中村耕治　中村芙美子
中山和記　難波秀哉
(に) 西川章　新村もとを
西ヶ谷秀夫　丹羽美之
(の) 野崎茂　野田宏一郎
信井文夫
(は) 萩野靖乃　橋口義春
橋本潔　林勝彦　林健嗣　林裕史
原由美子　原田庸之助
(ひ) 備前島文夫　久野浩平
一杉丈夫
(ふ) 深町幸男
福田雅子　藤井潔　藤井チズ子
藤代勝博　藤田晋也　藤久ミネ
(ほ) 星田良子　堀川とんこう
(ま) 松尾羊一　松田輝雄
松平定知　松前洋一　松本明
松本修　松本国昭
(み) 三上義智　三国章　水上毅
水野憲一　満島保夫　三村景一
三村千鶴　宮川鑛一　宮脇厳雄
明神正
(む) 村上光一　村上憲男
村上雅通　村上佑二　村木良彦
村田亨
(め) 銘苅栄昌
(も) 守分寿男　諸橋毅一
(や) 八木康夫　矢島良彰
薮内広之　山県昭彦　山崎隆保
山崎裕　山路家子　山田良明
山田尚　大和定次　山根基世
山辺麻未　山本恵三
(ゆ) 湯浅和憲
(よ) 横沢彪
横山英治　吉澤保　吉永春子
吉村直樹　吉村誠　吉村光夫
(わ) 和田智允　渡辺紘史

◆ 新会員紹介　中山和記さん　渡辺紘史さん

次号予告：グランプリ特集と日韓中フォーラム(天津市)経過報告。6月刊行。

編集後記

「あるある」ケースは深刻だけど、「街の声」で拾ったはずの「意見」が街の「常連」の声を集め加工したものだったりする。たかが占い師やスピリチュアルの伝道師の類いによる人生相談カルト・バラエティーが蔓延しても高視聴率で手放せないし、第一、心の領域のインチキ性は「あるある」的に追いつめるのは記者レベルでは限界がある。多幸症的表現でシャレのめす消費文化の氾濫の中で、テレビは今あてどなき漂流を続けている。カニは甲羅に似せて穴を掘るならば、テレビを軽蔑するものは軽蔑に値するテレビしかもてない。こんなエンドレス・ゲームより、ケータイの〝おや指文化〟でひろがる世界のほうが面白いとソッポを向かれはじめたテレビ。これでいいのかテレビ！　そろそろテレビの来し方行く末を考えてみましょう。

今回は「あるある」事件の特集と、なぜか会員諸氏の著作が集中的に現れ、大作や話題作の映像作品が出揃った現象を増ページして紹介しました。

なお、会報の編集方針は「本記」に限っては幹事会で提案された承認事項のみにさせていただきます。もちろん「雑感」は自由です。また、当会報の記事は無断転載禁止が原則で、引用や転載は事務局まで連絡してください。

(編集部　松尾　伊藤)